

<活動の記録> 高校生の野外調査を指導して

坂下, 利克

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

60

(終了ページ / End Page)

63

(発行年 / Year)

1966-03-21

活 動 の 記 録

「高校生の野外調査を指導して」

坂 下 利 克

教壇に立つて4年目に、私は世田谷区を中心とする私立高校の地理研究サークル（社会郷土研究会）の顧問となつた。これがそもそも私が野外調査において生徒を指導するきっかけになつたもので、この研究会についてはかつて法政地理5号で紹介しておいた。

以来今年をもつて10年研究指導を続けてきたわけであり、このうちのはじめ2年間は参加校による共同調査、残り8年間は私の学校単独の調査活動である。

前者はいわば暗中模索の時代として、思いつくままに近郊農村、山村、海苔養殖等を日帰りコースでまとめあげるのがせいいつばいであつた。参加校生徒を率いての共同調査は僅か2年で消滅した。しかしその際集つた生徒諸君は「赤とんぼの会」という組織を作つて、卒業後もなお今日に至る迄緊密な結びつきを維持している。いわば「坂下パーティ」とでもいうべきものである。昨年11月その中から2組目のカップルが誕生した。いつばう社会郷土研究会は、現在では参加校それぞれの研究を交換する場として、細々ながらその命脈を保つている。

合宿による調査がとり入れられたのは、調査活動開始後3年目、すなわちわが校単独の調査にきりかえられて以後である。そしてこの頃から調査対象も漁村・開拓地に集中することとなつた。

以上が私の歩んできた調査指導の概略であるが、この中から私達が昨年行なつた鶏頂山開拓地の場合を思い起しつつ調査の進め方を紹介し、おおかたの御批判をえたいと思う。

まず調査地域あるいは調査対象の選定であるが、すでにマンネリ化している私の場合にも、一つの調査が終るごとに、あるいは次の計画をたてる際に問題になるのは、「農村調査とはいつたい何か」「何の目的でやるのか」という疑問である。この点に関しては東大出版会からひと昔前に「農村調査研究入門」と題する本が出され、ほぼ問題点は要約されているので、今更あらためて論ずるのも面映ゆい感じがするが、私自身がその頃生徒に与えた言葉は次のようなものであつた。

「……。私たちと同じ国土に住む人達が、いまいかなる問題に悩み、どのような生活を営んでいるか、その理解なくしては、よりよい未来を私達の祖国の上に作り出すことはできないである

う。農村人口の占める比率が極めて高い特異な文明国家であつてみれば、その必要性は特に強調されなければならない……。しかし高校生の行なう調査には、かかる目的に加えて、もう一つ大切なねらいがある筈である。研究会は私たち平凡な人間が共通の目標の上に話し合い、そして考え、更に批判し合う学問の場である。その中で、私たち1人1人が学び、そして鍛えあげられて行くのである。それは大なり小なり、どの研究団体にもあてはまることであるが、私たち高校生の場合、特に重要な意味をもつていられる。私たちは研究会活動のあらゆる機会を捉えて個性を伸ばさなければならない。たえず築き上げられて行く1人1人の進歩の上にこそ、組織はいつそう強化されるのである。……………」

大学進学競争率激化に伴い、高校教育の歪みは年々大きくなって行く、この様な状態の中で、われわれの研究活動は益々困難になつて行くであろうが、そのような社会なればこそいつそう学問する心は育てられねばならない。

かくて私は調査対象の選定に当つては、問題の如何よりもむしろ次の様な点を一義的に考え、生徒に示唆を与えている。

1. 若い人達の調査研究に理解を示し、快く協力してくれるような雰囲気のある所。
2. 美しい自然に囲まれている所。
3. 宿泊・交通費等に余り負担がかからず、医療機関にそれ程時間的距離がへだたつていない所。
4. 調査対象が何らかの意味で特色を有し、若い人達に興味を抱かせる地域。

われわれの調査が近年野辺山・西富士・鹿放ガ丘・鷄頂山（来年度の予定は万座に近い仙之人か、南伊豆の天神原である）等の開拓地に偏よつているのは、以上のような理由からである。

なお参考までに書き添えておくと、関東周辺の開拓地に関する資料（開拓営農実績調査等）は築地の関東農政局構造改善部入植営農課にあり、私は数年来ここのお世話になつている。この事務所の管轄範囲は関東全域と長野・山梨・静岡である。必要のむきはいつでも御紹介申し上げます。

私は以上の資料によつて適地を選び、生徒と相談して候補地を確定している。そしてこの事務所から現地に前もつて連絡を依頼し、公文書を提出するのはこびとなる。

公文書は私が直接下見かたがた現地におもむいて開拓農協の組合長に手渡すこともあり郵送する場合もある。

次の手順は校内における学習活動である。放課後のクラブ活動の時間を使い、農業問題一般及び調査地域のあらまし（統計資料・地形図・地名辞典・下見の際の聞き込み等をもとに）を勉強

する。

(なおこれと並行して私の学校では毎年全生徒の通学圏を2万5千分の1のスケールで図化する作業を併せ行なっている。)

夏休み直前には最後の準備段階として次のような仕事がある。

1. 戸別調査に備えての班編成
2. 調査用紙の作成と用法の指導
3. 戸別訪問に際してのエチケット
4. 調査用品の整備(ノート・フィルム等)

地理研究部には生徒会から約2万5千円程度の補助があり、現地調査にはその中の半分が使用されている。現地調査は、ふつう夏休みのはじめに行われ、3~4泊で実施される。数年前までは小・中学校を宿舎に用いていたが、昭和37年の野辺山調査以来旅館(平均3食付700円)を利用している。参加者は例年10名前前後で、2~3名のOBがこれに加わり、後輩を導いてくれる。

現地調査は開拓農協組合長(もしくはそれに替る人)からの概況説明聴取にはじまる。ふつう3~6時間を要するが、これは現地に着いたその日に実施される。余談になるが組合長といえは、私たちが昨年冬訪れた千葉の鹿放が丘開拓農協の組合長さんは実に立派な人だつた。西田幾多郎の門下生として京大の哲学科に学んだ人だが、御自身が敢えてこの道を選ばれた理由を熱のこもつた言葉で語られ、夕闇につつまれた室内の暗さに気がつかれぬ様子であつた。日本農業の進むべき道と御自身が実践されようという西田哲学の精神が、氏の中に一体となつているのを感じ、私はかつてない衝撃を覚えた。オーバーの襟を立てて駅に戻る道すがら生徒から聞いた感想もやはり類似のもので、日帰り調査にこれ程の教育的効果を自覚した瞬間を私は未だに経験しない。—————

第2日、第3日は戸別の聞きとり調査で、計画どおり班毎に別れて行動する。そして夕食後各班の報告が行われ、各人がそれぞれの頭で村の全貌を組み立ててゆく。農家訪問にはまたいろいろな挿話がつきもので、失敗談に顔をかく者もあり、胸をそらせる連中もいる。

現地調査の最終日は約半日をレクリエーションに当てることにしている。それは私の目的の重要な一項目なのである。

かくて次の報告書作成の段階に移るわけである。

帰京後、残りの夏休み期間を利用して、各人がレポートを作成する。この場合私が予め報告書の構成を考え、生徒は項目毎に分担執筆することとなる。余談になるが現在の若い人達の表現能

力は決してほめるべきものではなく、その校正・指導は毎年私の頭痛の種である。

報告書の原稿が完成し、やがて印刷所から製本が届く頃、私の学校では文化祭の準備最終段階ということになる。そして、地理研究部でもまた、晴れの当日を目指して、次の新たな仕事ととりかかることとなるのである。

以上私はわが校における研究指導のあらましを思いつくままに記してみた。こうしてまとめてみると、いかにももつともらしいが、実は未解決の問題も少なくないのである。

私は最近自分自身がいかに指導性に欠けているかという点に漸く気がついた。指導上の技術的な問題もさることながら、更に本質的な問題としては、マンネリズムを意識した時の嫌悪感、報告書の価値に対する懐疑感等、これらの漠とした不安は、私の地理教育に対する自信をも喪失させるのである。

地理学徒として、同時に教育者としての限界を、私は最近痛切に感じている。自らを知る上において私の部活動指導は極めて有意義なものであつた。同時にその反面、自分自身への気休めとして、現在実施されているような社会科地理というものが、あるべき姿としての普遍的な存在価値を有しているかどうかという点にも、若干の疑念をもっている。

高校教育の一科目として「地理はいかにあるべきか」を問う前に、「なぜ地理教育がなされねばならぬか」が、私にとって問われねばならぬ出発点なのである。若い人達の人間形成にこの学問が参与するメカニズムが、教壇生活十余年の私の頭の中で、未だ理解されぬまま放置されている。

重商主義時代に果し終えた地理学のプラグマチックな役割。環境決定論、地人相関論、可能論等の歴史的考察。社会科学の一分科としてというよりも補助科学としての地理学（地理的な見方）乃至は地誌学。

これらの意義は高校教育の中の独立した一科目としての地理学の本来的使命とは私には考えられないのである。

たいへん思いあがつたことを書きましたが、さきの野外指導に対する御批判とともに、併せてこの点につき、現場で直接指導に当つておられる先学諸兄のお考えをお聞かせいただきたいと存じます。

（日本学園高校教諭 28年度学部卒）